

今回は、5月26日に行われた口腔顔面痛ベーシックセミナーについて東京医科歯科大学大学院口腔顔面痛制御学分野の栗栖諒子先生に報告していただきます。

口腔顔面痛ベーシックセミナー参加報告

東京医科歯科大学大学院 医歯学総合研究科 口腔顔面痛制御学分野 栗栖諒子

一般社団法人日本口腔顔面痛学会口腔顔面痛ベーシックセミナーは、2019年5月26日(日)日本大学歯学部3号館第5講義室において64名の参加者を迎えて開催された。

本学会ベーシックセミナーは口腔顔面痛の魅力と概要を知り、口腔顔面痛学を学ぶ礎とすることを目的とした座学コースである。明日からの臨床に役立つ内容となっており、勉強になったので、ご報告させていただく。

今回の口腔顔面痛ベーシックセミナーでは7人の先生方が講演をされた。最初に**今村佳樹理事長**(日本大学歯学部口腔診断学講座)からご挨拶があり、講師陣が若手に一新されたこと、事前申し込みが多かったとのことのお話があった。次いで、**村岡渡セミナー企画運営委員長**(川崎市立井田病院歯科口腔外科)から2019年度の口腔顔面痛学会主催のセミナーのご紹介があった。今年度は例年と異なり、「エキスパートセミナー」は開催されず、「入門セミナー」が新規開設されるとのことであった。

講義初めは、**桑島梓先生**(日本大学松戸歯学部有床義歯補綴学)が「**口腔顔面痛学の魅力と概論**」についてUCLAでの留学経験をふまえて口腔顔面痛を学ぶ上での基本的事項を解説された。

痛みには「侵害受容性疼痛」「神経障害性疼痛」「心因性疼痛(現在は心理社会的要因による痛み、あるいは非器質的疼痛ともいう)」と種類があることを症例とともに提示された。口腔顔面痛クリニックで扱う症例は「非歯原性歯痛」「顎関節症」「三叉神経ニューロパチー」「頭痛」「睡眠時無呼吸症候群」があり、一般診療所でも0.9%の確率でこういった患者さんに遭遇するという数値を示された。実際にどのような患者さんが来院するかを筋・筋膜性歯痛を例に紹介された。また、見逃してはならない疾患として、「脳腫瘍による三叉神経圧迫による三叉神経痛」と「巨細胞性動脈炎」の2症例提示され、正確に鑑別診断するためには、まずは病気を知る必要があると述べられた。



質問に応える桑島梓先生

次に、**篠田雅路先生**(日本大学歯学部生理学講座)から、「**必須の痛みのメカニズムと薬理作用**」について講義があった。

痛みを受容する自由神経終末から活動電位が発生する過程、痛みの強さは活動電位の発火頻度によること、三叉神経領域での末梢から中枢への痛みの情報伝達経路について図を用いて基本的なところをわかりやすく解説された。さらに薬の標的部分を下行抑制系にふれつつ、NSAIDsから抗てんかん薬、抗うつ薬、オピオイドに至るまで詳細な説明があった。

その基礎的内容を、桑島先生が4つの薬に絞って臨床での話に掘り下げて症例とともに解説された。両側顎関

節炎と診断した症例に対し、ロキソプロフェンナトリウムを頓服投与するのではなく連続投与することの用法を患者さんへ説明することの重要さや、カルバマゼピンやプレガバリンの副作用を具体的に解説され、血液検査といった検査の必要性なども示された。



野間昇先生

次に、野間昇先生（日本大学歯学部口腔診断学講座）から「**痛みのための医療面接**」についてレクチャーがあった。

理解しておくべき内容として、口腔顔面痛に関して米国では「頸部の筋骨格痛」や「神経血管性疼痛」が重要視されていることとお話しされた。また患者さんの理解において生物心理社会的モデルが大切であること、診断においては待機的診断もひとつの方法であることなど示された。

午前の最後には、原節宏先生（日本歯科大学顎関節症診療センター）が「**咀嚼筋由来の歯痛とは**」という演題で、新しい知見をふまえ概説された。

筋・筋膜性歯痛は非歯原性歯痛の中では最も頻度が多い病態でありながら、そのメカニズムは十分に解明されていないことに触れた上で、歯痛・歯根部痛を生じさせる筋肉と投射される部位を解説され、和嶋先生が監修された動画で実際に関連痛が生じる診察の様子を供覧した。後半は、関連痛のメカニズムについて最新の知見を提示し、難しいところを噛み砕いて解説され、ご自身の見解を示された。最後に、症例提示により実際の治療アプローチについても解説された。

午後からは、岡田明子先生（日本大学歯学部口腔診断学講座）より「**歯科で生じる神経障害性疼痛**」について講義があった。

神経障害性疼痛について国際疼痛学会で示されている定義「体性感覚神経系の病変や疾患によって引き起こされる疼痛」を確認した後に、三叉神経痛と帯状疱疹後神経痛について症例を示し解説された。三叉神経痛については発作痛を生じている動画により症状の特徴を確認し、鑑別するべきポイントを示された。突然あるいは誘発されて強い発作痛が生じ、会話が困難な様子を確認した。急性期帯状疱疹から帯状疱疹後神経痛に至る臨床症状を時系列に従って複雑な病態を痛みの種類とともに解説された。



岡田明子先生

次に、白田頌先生（慶應義塾大学病院歯科口腔外科学教室）より「**歯科で役立つ頭痛の知識**」について講義があった。

頭痛で役立つ2冊のテキスト、『国際頭痛分類第3版』『慢性頭痛の診療ガイドライン』を紹介された。国際頭痛分類に従って一次性頭痛として「片頭痛」「緊張型頭痛」「三叉神経・自律神経性頭痛」を示され、片頭痛の前兆である閃輝暗点は動画にて確認した。芥川龍之介はこれを歯車と表現したという話もあった。二次性頭痛については「顎関節症による頭痛」を緊張型頭痛と対比させて解説され、頭痛のガイドラインにおいても筋を触診して顎関節症の診断をすることの重要性が示されているとのことであった。いずれの頭痛診断においても他疾患を除外することが重要であるということで、最後に頭痛のRed Flags（見逃してはいけない徴候や症状）を示され、詳細は



白田頌先生

診断実習セミナーへの参加を促された。

次に、岡田明子先生より「診断に導く臨床診断推論とは」について概説いただいた。

臨床診断推論とは、「主訴・病歴・基本的身体所見などから鑑別診断のヒントとなる“キーワード”を挙げ、それを軸に疾患を推定し鑑別診断名を想起する方法」ということをステップに従って解説された。

第1ステップの包括的病歴採取した内容をSQ (Semantic Qualifier : 医学用語に置き換える) にすることから、第2ステップの鑑別診断の列挙、第3ステップの鑑別診断の確認作業、第4ステップの整合性確認を経て、第5ステップの最終診断に至る過程を学んだ。



村岡渡先生

その後、その臨床診断推論について、村岡渡先生より実際にどう使用するかにあつたのレクチャーがあつた。症例を用いて構造化問診表から推論していく疑似体験をすることができた。最後に小テストがあり、本日学んだ知識を確認した。

今回のセミナーにて講義を担当して下さつた講師の先生方に感謝いたします。今回学んだ口腔顔面痛の基礎医学から診断、治療までの幅広い知識をより深め、日常臨床に活かすためにも今後も学び続けてまいりたいと思つています。私は口腔顔面痛のセミナーを受講しはじめて数年たちますが、特に感じましたのは講師の先生はじめ参加者も同世代が多かつたことです。大変嬉しく思つました。

なお、本セミナーは毎年1回行われる予定です。

【栗栖諒子 (くりすりょうこ) 先生のプロフィール】



2016年 日本大学松戸歯学部卒業/日本大学松戸歯学部附属病院研修医
2017年 東京医科歯科大学歯学部附属病院ペインクリニック大学院研究生
2018年 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科口腔顔面痛制御学分野大学院生

日本口腔顔面痛学会 News Letter へのお問い合わせは

「日本口腔顔面痛学会事務局」まで

〒135-0033 東京都江東区深川 2-4-11 一ツ橋印刷株式会社学会事務センター内

TEL: 03-5620-1953, FAX: 03-5620-1960 E-mail: jsop-service@onebridge.co.jp